

## 椎茸栽培の父 原田利三郎

佐伯史談会誌第二十八号に平山小文治編纂、増村隆也訳の「鶴藩略史下」の記事がある。つれづれなるままに先人の書かれた記事を繙解していく内に、我が家の祖先利三郎に関わる記事が載っている事を発見した。

この鶴藩略史は昭和二十二年に柴田南華堂で見出され平山笑子氏と増村隆也氏が会誌二十四号から三十号に要約発表されたもので、最近では平成十一年に林寅喜氏が再版している。

この鶴藩略史の第十一代藩主高泰公の項に、次のような記載がある。

### (一) 鶴藩略史 「第十一代高泰公」より

天保七年(一八三六)上野村理三郎、櫟くぬぎに試みて効あり、此藩がこの議が起きた時、伊豆の人重蔵を因尾の山部やまぶ山にて、下直見金石衛門をしてその方法を受けしめた。その方法たるや曾耶樹そよのきを専ら用ひ、其の他の木は用ふ

る事はなかつた。理三郎は袖頭そまがしらとして、最も其の修習に留意して初めて其の理を究め、初めて曾耶樹を用ひ善良なる結果を得、人皆之に習ひ産額頓とんに増殖し、民間で巨利を得るに至つたのは理三郎のお蔭である。

とある。

原田利三郎は、文化二年(一八〇五)七月十九日に尺間村長畑なかはた(現、佐伯市弥生大字尺間字長畑)の川野磯七の次男として生まれている。名を良吉、利三郎(理三郎)時には助右衛門と呼んでいたと言う。

文政十年(一八二七)二月六日、原田家の養子となる。

### 《系図》

原田良吉(利三郎①) ↓ 亀太郎 ↓ 利三郎② ↓

良雄(利三郎③) ↓ 利光

※代々利三郎を襲名する。

### (二) 佐伯藩における椎茸栽培と利三郎

佐伯藩では宝永二年(一七〇五)、藩の事業として木炭製造が始まり、青山・大越・赤木・仁田原・因尾の五カ村に炭竈すみかまじを設置し木炭の製造を行っていた。又木材を伐り出し製塩事業に取り組み瀬戸内海方面の国々に、燃料

として販売していた。

十八世紀初頭佐伯藩は、右五カ所を御立山（藩有林）として森林資源をほぼ独占し樵木、木炭製造に精を出していた。

そのような木炭製造で、より良質の木炭を製造する為には、木炭の原木に絡みつく葛等を切り取る必要がある。この邪魔な葛類を鉋や斧で切り取り炭の原木として利用していた。葛等を切り離した原木の一部が、たまたま木炭製造に回されず数年間放置され、それに自然発生的に椎茸が生じたという。

これに着目した佐伯藩津久見村千怒出身の源兵衛（「しいたけ源兵衛」と呼ばれる）が人工栽培に着手した。これが大分県の椎茸栽培の始まりと言われている。

椎茸栽培の元祖は諸説あるが、この「しいたけ源兵衛」と伊豆の住人「斉藤重蔵」と言われている。

当時、利三郎の住む上野村も木炭製造や樵木に精出していたと考えられる。

利三郎の椎茸栽培に関わったという文書は発見されていない。父や祖母の話から推測するばかりだが、次のような話が伝わっている。

○文政の始め、椎茸の原木の多い宇目町重岡（当時岡藩）

で、伊豆の人から椎茸栽培の技術を修得、椎茸栽培でみんなが敬遠していた方法に着目、「原木には櫟が一番効果的」との考え方を発見した。当時は椎茸の原木としてハサコ（櫟）、ソヤ（シデ・四手）が主に使われていた。

○当時、原木として利用していた、ハサコ、ソヤは源兵衛の考え出した鉋目法では、菌が活着しやすく椎茸を多く算する事ができるが粒が小さく旨味が少ない。ソヤは原木としての寿命が一年。翌年使用できず。

○櫟は鉋目法では木の皮が厚く活着しにくく椎茸を多く算することはできないが椎茸としては大きいものが取れる。

○利三郎は原木の研究をし、櫟の木に一番多く椎茸を発生させる事が出来るようにし、旨味のある大きな椎茸を量産する事に成功した。原木も長持ちする事に気づいた。

○天保七年（一八三六）、本匠村江平（佐伯領）、宇目木浦西山（竹田領）にて櫟による椎茸栽培に成功した。（利三郎三十一歳）

○栽培方法を地域の人（直川村農金右衛門等）に教え、

藩にも献上した。

○春と秋とで何億円も儲けた。(一両≡拾万円換算)

○質の良い椎茸が出来るようになり、各地の神社仏閣等に寄進、藩主より紋章入りの短刀一振を受賞する。

○藩より格式のある立派な家を建ててる事を許された。立派な仏壇や上座が現在も残されている。

○仏壇に斉藤重蔵親方の位牌を安置し、朝夕礼拝していたという。

原田利三郎についてはあまり知られていないと思う。これまで出版されている書籍の中から二冊紹介する。

「佐伯先哲小傳(佐藤藏太郎著)」

君は本郡上野村の人なり、資性着実、能く林業に熟練し、命じられて同村の杣頭そまづを勤む。文政年間、佐伯藩は伊豆の国より椎茸製造人重蔵なるものを雇傭こようし、領内因尾村字山部山林に於て其業を開き、下直見村農金右衛門をしてその製造を伝習せしむ。

これ佐伯藩に於て椎茸製造の権輿けんいなり、されど當時、椎茸を生ぜしむるには、専ら「ソヤ」の木のみ限り、他の木に用うること無かりしなり、然るに杣頭利三郎、種々研

究して工夫をめぐらし、櫟の木に椎茸を発生せしむるこ

とを發明し、好結果を得て爾後大いに其の製造法を改良し、生産額多大を加え、且つ従来の製品に比し、非常に優良なる椎茸を産出せしむるに至れり。現今、各地に於て椎茸を製するに専ら櫟樹くろぐまを用ゆることは、実に利三郎氏發明の遺惠なり。今や椎茸は本郡主要の物産として、年々の生産額、六万斤以上に昇り、其価額五千万円以上に達せり。是れ利三郎が櫟樹發生の發明に基因せる所にして、同人の功績せんしき鮮せう少せうなりとせず(原文)

#### 《語句説明》

・杣頭そまづ ≡ 豊後茸師むしの山元、親方であり、その下に次山・室番・添番・馬方・駄飼・炊ぎ・火番等の多くの人を従える。

・ソヤ ≡ 四手(シデ)、カバノキ科シデ属の落葉高木  
イヌシデ、サワシバ等の総称、一年間椎茸の元木として使用、収穫すると朽ちてしまう。

・櫟樹 ≡ くぬぎ ブナ科の落葉高木

・斤 ≡ 重量の単位 一斤 ≡ 一六〇匁 ≡ 六〇〇g

・六万斤 ≡ 三六トン。

・鈍目法Ⅱ江戸時代早期に大分県で開発された椎茸栽培の方法。樫、檜材を炭の原材料として利用していた。これらの木にはカズラが多く巻き付為鈍で切り払っていた。その際木の面に鈍の刃が当たり木肌に鈍の刃の跡が残った。

炭焼き用に積んでいるこれらの木々のうち焼き損ねた二、三年物の木々に自然発生的に椎茸が発生した。これを人工栽培として取り入れた。千怒の源兵衛が始めたと言われている。

#### 「新佐伯」(昭和四年発行・佐藤藏太郎著)

第廿四章椎茸製造業・歴史には椎茸も本郡重要物産の一種として其生産額亦少しとせず製造の始めは文政年間にて藩之れを奨励し其技に熟達せる伊豆國の産、重蔵なる者を雇い入れ、領内因尾村字山部に於て其業を開始したり。次に下直見村農金右衛門をして其の製法を受け継がしむ。是本郡椎茸製造の権輿なりされど、當時はもっぱら「ソヤ」の木のみを用いたるに過ぎざりしを、其比、柚頭上野村理三郎(一に良吉とも言う)なる者種々研究の末、遂に樫に発生せしめて好結果を得たり。夫より相傳え

ての法を用い、爾來年々製造高増加するのみならず製法も益々精巧を極むるに至れり。舊藩時代椎茸を製造したる方法の梗概を記すれば左の如し。

九月(陰曆)中旬、「ソヤ」「クスギ」「ハサコ」等の樹木を伐採し、鈍或いは斧を以て、其の樹幹に距離五寸許毎に斫痕を付け、其儘に放置し三年を経たる後、冬日、其の樹を鋸にて長さ三尺乃至五尺に切断し、悉く之を日光の到らざる溪間樹蔭に露積し、其の翌春横棚を結構して、前後より之を寄架するときは、無数のナバ簇生す。其の完熟するを待ち適採するを「春子」と云う。

其年の秋に至り、右の樹幹を溪水に浸すこと一昼夜にして引き揚げ、木槌にて材端を乱打し、横棚に架け置く時は約三四日してナバ發生す。其の完熟するを待ち適採するを「秋子」と云う。而して乾燥せしむるには、間口九尺、奥行四間の爐室を造り、室の両側に竹棚を層架し、蒸甌(俗にエビラと云う)に生ナバを排列し之を棚上に置き、其の下に炭火を焚きて炙焙稍く乾燥するを度りて上下を交換し、一昼夜を経て全く乾了せしむ、之を箱または紙袋に容れて貯え、而して時々日乾又は炙焙してカビを予防するなり。

郡内山間部の諸村盛んに之を製造しその産額豊富にして品質も亦優良なり。佐伯ナバとして阪神地方、台湾大連方面に輸出し其他内地各所にも移出するもの鮮すくなからず。大正十一年中の産額八万二一四八斤、価格一二万三二二二円に達す。昭和元年中海路大坂市場に移出せしもの二〇一九箱。一箱の値段平時二百円として此の価格四〇万三八〇〇円也とある。

このように原田利三郎が「椎茸栽培の父」と呼ばれるにふさわしい内容が披見できる。

原田利三郎について調べる中で、興味深い資料があった。これは静岡県高田郡狩野村出身の鈴木伊兵衛紹介の古文書である。「大分のしいたけ」より）

一、先極之通、仕込銀並雜用運賃口銭水上等指引 利益  
式割相渡申候

二、茸山仕込銀高之儀 毎度勘定帳ニ相記シ置メ高之処  
染矢国藏、沢田九馬之助 其許立合ニ而 印形致置  
大坂問屋仕込状高ニ而 勘定可致事

右之通 相極候処相違無御座候 以上

佐伯茸山元メ 染矢 国藏

沢田 九馬之助

### 《参考》

※椎茸源兵衛（栽培開祖）

・源兵衛翁は佐伯藩千怒の浦（現津久見市千怒）の生まれで、今から三百五十年ほど前、現在の大分県宇目町葛の葉（當時は岡藩領、現佐伯市宇目小野市）にて、家業の炭を焼くかたわら、偶然たまたま残槽のこぼたの木に椎茸の生えているのを発見し、これを見て人工栽培を決意、苦心研究の結果、自然の教示を得て鈍目式の椎茸栽培法を確立した。

佐伯市宇目振興局前広場と津久見市民会館前に記念碑がある。津久見市千怒入口に源兵衛の石碑あり。



※斉藤重蔵（一七八一〜一八四五）

・天明元年、豆州岩科村岩地（現静岡県賀茂郡松崎町）で生まれる。

・文政二年、岡藩に招かれ岳山（竹田市大字上畑字柳谷）で椎茸栽培に取り組む。岡藩藩営しいたけ栽培事業の仙頭格として活躍。藩の財政面に多大に貢献し、名字帯刀を許される。名刀は家宝として伝えられている。岩科村諸石神社の大幟を寄進する。

佐伯藩の椎茸栽培に関わった人として、江戸時代、下直見村の農金石衛門や堅田郷の天野辰兵衛（椎茸貿易の祖）津久見の三平、徳蔵、嘉吉、平九郎、久吉などがあり、明治以降では津久見の西郷武十、佐伯の月本小策、黒木幸太郎、大分市の姫野佐平などの名前があげられる。

【参考文献】

- ・佐伯史談第三十号（佐伯史談会）
- ・鶴藩略史（平山小文治著 復刻版）
- ・佐伯先哲小傳（佐藤蔵太郎著）
- ・新佐伯（佐藤蔵太郎著）
- ・大分のしいたけ（伊東六郎著 アドバンス大分）
- ・豊後の茸師（青木繁著 富民協会）
- ・全国きのこ新聞（平成十九年元旦刊）
- ・大分県歴史人物事典
- ・津久見市史